

商 学 集 志

第92卷 第3号 (2022年12月)

【論文】

マンデヴィルの経済思想と「ブンブンうなる蜂の巣」

Mandeville's economic thinking and his  
“The Grumbling Hive”

関 谷 喜三郎  
SEKIYA Kisaburo

日本大学商学部

【論文】

# マンデヴィルの経済思想と「ブンブンうなる蜂の巣」

## Mandeville's economic thinking and his “The Grumbling Hive”

関 谷 喜三郎  
SEKIYA Kisaburo

### 目次

- 1 はじめに
- 2 ブンブンうなる蜂の巣—悪人が正直者になった話—
- 3 17世紀後半のイギリスと奢侈的風潮
- 4 マンデヴィルの経済思想
- 5 おわりに

### (要旨)

本稿は、バーナード・マンデヴィルが1705年に匿名で公表した長編の詩、「ブンブンうなる蜂の巣—悪人が正直者になった話—」の翻訳と、この詩に対する批判に応えるために書かれた『蜂の寓話』を経済学の観点から考察し、そこで展開されたマンデヴィルの経済学的説明の意義を再評価しようとするものである。「詩」については、これまででも翻訳がなされているが、そこにみられるいくつかの誤りと不十分な表現を修正し、より読みやすいものにしていく。さらに、『蜂の寓話』で用いられた説明が、近代経済学が確立してきた経済原理の原型としてマンデヴィルの議論の中に示されていることを再確認しようとするものである。

## 1 はじめに

本稿は、バーナード・マンデヴィルが1705年に匿名で公表し、1714年に注釈を加えて、単行本として出版した『蜂の寓話』に再録された「ブンブンうなる蜂の巣—悪人が正直者になった話—」(Mandeville, de Bernard, 1714, pp.17-37) (以下、『詩』と略記) という長編の詩の翻訳と、主に『詩』の注釈からなる『蜂の寓話』(Mandeville, 1714) の経済学的意義を再考察しようとするものである。

マンデヴィルの『詩』については、部分訳も含めれば多くの研究者によって翻訳がなされている。全訳については、上田辰之助著『蜂の寓話—自由主義経済の根底にあるもの』(新紀元社, 1950年)、泉谷治訳『蜂の寓話』(法政大学出版局, 1985年)、鈴木信雄訳『新訳 蜂の寓話』(日本経済評論社, 2019年) などがある。

マンデヴィルの『詩』は、17世紀の後半から18世紀の前半にかけて、イギリスが中世から近代に転換する時代のあり様を描いたもので、経済的繁栄が時代の変化を押し開いていくときの社会の勢いと混乱を詩の形を借りて描写している。それは、当時の宗教上の指導者たちが、経済活動の拡大の渦中における社会の混乱を新たな時代への胎動と見る代わりに風紀の乱れと捉え、中世の信仰の時代に無理やり回帰させようとするとき、それが経済の繁栄にとってどのような意味をもつことになるかをマンデヴィル独特の表現で風刺したものである。これを経済学の視点からみると、そこには単なる社会風刺の域を超えて、近代以降の経済学にな少なからぬ影響を与えた「マンデヴィル経済学」の原型が示されているとみることができる。そうした観点からマンデヴィルの『詩』を考察する時、そこに描かれている世界をできるだけ正確に表現する必要があると思われる。本稿における翻訳の意図もそこにある。

この論文のもう一つの目的は、『詩』における過激な表現に対する批判に応えるために、『蜂の寓話』において「注釈」という形で行ったマンデヴィルの記述が、単なる弁明の域を超えて、後世の経済学のベースとなる経済理論を用いてなされていることを確認することにある。スミス、マルクス、ケインズ、シュンペーター、ハイエクといった経済学説史上の偉大な経済学者たちがマンデヴィルの『蜂の寓話』に言及しているのは、単なる偶然ではなく、アダム・スミスを嚆矢として現代まで250年にわたって展開されてきた「経済学」の基本的な思考の原型がそこに示されているからに他ならない。本稿では、『詩』における記述をもとにしながら、マンデヴィルの経済思想を再確認していく。

## 2 ブンブンうなる蜂の巣—悪人が正直者になった話— (翻訳)<sup>1)</sup>

ある大きな蜂の巣があり  
贅沢で安楽に暮らす蜂が群れていた。  
若い蜂の大群を生み出すことで有名であったが、  
法による統治と武力を備えていることでも知られていた。  
そこは学術と産業を育てる  
偉大な苗床とみなされていた。  
これほどよい政治体制に恵まれながら、

移り気で、不満の多い蜂は他に類がなかった。  
彼らは、専制政治の奴隷でもなかったし  
粗悪な民主政治に支配されることもなかった。  
国王に苦しめられることもなかったが、それは  
国王の権力が法律によって制限されていたからである。

ここの蜂たちの生活は人間と変わるところがなかった。  
規模は小さいながら、やることは人間そっくりであった。  
街中ですることもすべて人間のそれと同じであり  
軍人もいたし、学者もいた。  
小さな手足を機敏に動かす巧みな仕事ぶりは  
小さ過ぎて人間の目には入らないが、  
そこには、我々も持たないような動力機具、労働者、  
船舶、城郭、武器、熟練工、  
工芸、科学、店舗、作業道具などがある。  
いや、実に何でも備わっていた。  
ただし、蜂の言語はわからないので、  
我々のやり方で語るほかない。  
当然のことながら、そこにはないものもあった。  
彼らはサイコロを持っていなかった。ただ、王様がいたし、  
護衛兵もいたので、そこから考えると、  
彼らがサイコロゲームをやっていたことは間違いない。  
賭博などまったくやらない一個連隊でも  
見せてくれるなら話は別だが。

膨大な数の蜂たちがこの豊かな巣に群がっていた。  
この多数の蜂たちが、繁栄を生み出している。  
互いの欲望と虚栄心を満たそうと、  
何百万という蜂たちが懸命に働いている。  
一方、別に何百万の蜂たちが雇われて、  
せっかく造ったものを乱用し費消する<sup>2)</sup>のに手を貸している。  
巣に必要なもの全体の半分ほどは供給できたが、  
仕事に労働が追いつかなかった。  
莫大な資本で、何の苦も無く  
大きな利益をもたらす事業に手を出す者もいたが、  
大鎌や鋤を使って  
骨の折れる仕事に従事する者もいた。  
そうした者たちは、日々汗を流し、  
食うために体の続く限り手足をすり減らしている。  
関わる者の数こそ多くはなかったが、

(A) あやしげな仕事に従事する者もあった。  
そうした仕事なら、資金は無くても恥知らずなだけでよい。  
苦勞することなく、商売を始めることができる。  
詐欺師、食客、女衒、博奕打ち、  
スリ、贋金造り、偽医者、エセ易者の類がそれである。  
真面目に働くことを嫌うこうした連中は、  
ずる賢く立ち回って、  
気立ての良い、無知な隣人の労働を  
自分たちのために使おうとする手合いである。  
(B) こういう輩は悪党と呼ばれたが、そうした呼び方はさておき、  
堅気の者も似たようなものであった。  
いかなる職業にも詐欺はつきものであった。  
不正のない商売はなかったし、そんな場所もなかった。

弁護士がよく用いる怪しげな手は、  
争いを生じさせて金儲けのネタにすることであった。  
あらゆる登記にケチをつけて、  
不動産物件の取引に絡んだ詐欺でより多くの儲けを生み出した。  
まるで訴訟を起こすことなしに所有を決めるのは、  
法に反すると言わんばかりである。  
故意に審理を引き延ばすなどしては、  
手数料をかすめ取っていた。  
悪質な訴訟の弁護を引き受けては  
法律の穴を探るさまは、  
どろぼうが、店舗や家屋を下見して、  
どこから押し入るのがよいかを決めるのに似ている。

医者にとっては、名声と富が大事であり、  
弱っている患者の健康や、医者としての自分の  
腕前のことなど二の次である。彼らが最も意を用いたのは、  
己の技量を磨くことではない。それは、  
威厳のある思慮深い面持ちと重々しい立ち振る舞いで、  
薬剤師の鼻屑にあずかることであり、  
出産や葬儀に立ち会う産婆や僧侶や  
その他の人々から称賛を得ることであった。  
絶え間なくおしゃべりする連中に耐え、  
奥様の伯母上の指図を承り、  
うわべばかりの微笑とやさしげな挨拶で  
家族みんなに媚びへつらう。  
中でもいちばん呪わしいのは、

厚顔無恥な看護婦どもに黙って耐えることであった。

天から祝福をもたらすために遣わされた  
ジュピター神を信仰する多数の僧侶の中には、  
博学にして雄弁な者も少しはいたが  
大半のものは、怒りっぽい上に、無学であった  
それでも、怠惰、色欲、強欲、高慢を隠し通すことができれば、  
誰でも僧侶となれた。  
彼らは、布の切れ端をくすねる仕立て屋とか  
酒浸りの水夫らと同じように見られていた。  
痩せこけて、みすばらしい身なりをして  
神妙な面持ちでパンを求めて祈りを捧げ、  
それによって、有り余るほどの蓄えをするつもりが、  
実際には、パンを得るのがせいぜいという者もいる。  
聖者のようにこつこつ働く者が飢える一方で、  
そういう彼らが仕える怠け者どもは、  
健康と豊穡の恵みを満面に湛えて  
ただ享楽に耽っていた。

(C) 戦いを強いられた兵士は、  
生き残れば名誉を手にすることができるが、  
血まみれの戦いを避けて逃げ出し、  
手足を撃ち落とされる者もいる。  
敵兵と戦う勇敢な将軍もいれば、  
賄賂を取って、敵を見逃す者もいる。  
つねにあえて激戦地に赴き、  
時には足を失い、時には腕を失い、  
すっかり不具になって相手にされなくなり、  
俸給を半分にされて暮らす者もいる。  
そうかと思うと、一度も戦に出ず、  
倍の給料をもらって国内に留まる者もいる。

国王に仕える大臣たちは性悪で、  
不埒な家臣に主君の方が騙されていた。  
国王の繁栄のために仕えたはずの多くが、  
自ら手助けした主君を食い物にした。  
手当が少ない割に贅沢な暮らしをしているが、  
そのくせ、清廉を自慢している。  
職権を乱用するたびに、  
偽りのごまかしで得たものを役得と称し、

役得なる隠語が民衆にバレてしまうと、  
それを報酬と言ひ換える。  
利得に関わることは何であれ、  
足りないとか、質素に暮らすとかは嫌いだった。  
(D) なぜなら、当然手に入るはずのもの以上とは言わないまでも、  
支払う相手にあえて提示する額より多く得たいと  
思わぬ蜂などまるでいなかったことは、いわずもがなである。  
(E) それは、博奕打ちが正々堂々と勝負しても、  
負かした相手の前では、  
儲けた金額を言わないのと似ている。

詐欺行為を残らず列挙するなど無理な話である。  
土地を肥沃にすると称して、街頭で  
ごみ同然のがらくたが売られている。  
役にも立たない石やモルタルが  
四分の一も混ざったものに  
出くわすこともしばしばである。  
とはいえ、バターと称して塩を混ぜて売った某フレイル（農夫）<sup>3)</sup>に  
文句の言える筋合いはない。

公平なことで名高い正義の女神といえども、  
目隠によって損得の意識まで覆い隠されることはない。  
女神は金で買収されて左手に持つ  
はずの天秤をしばしば落とした。  
刑罰が体刑に留まる限りは、  
女神は公平にみえた。  
殺人やあらゆる暴力沙汰の罪に対しては  
ことさら規則に従った。  
ある者ははじめ詐欺罪でさらし台に乗せられ  
次に打ち据えられた麻縄を使って絞首刑に処された。  
だが、世間の目には女神の剣は  
貧しくて自暴自棄の者だけを突き刺すように見えた。  
そうした者たちは、窮乏に追い込まれたばかりに  
衰れにも絞首台に縛り付けられた。  
それはそんな不運に会うべき罪ではなく、  
ただ、裕福でお偉い方々を守らんがための犠牲者なのである。

かように、ひとつひとつを見れば悪徳に満ちていたが、  
全体としてみればまさに天国であった。  
他の巣からは、平時にはこびへつらわれ

戦時には恐れられ、尊敬の的でもあった。  
富も命も惜しまなかったので  
他のすべての蜂の巣と対等に渡り合えた。  
国家の天恵はかくも偉大であり  
罪の部類も偉大な国家をつくるのに役立った。  
(F) 商売を通じて数多くの巧みな策略を  
学び取るという美德は  
それが運よく効果を発揮することで、  
悪徳と近い間柄になった。  
(G) かくして、悪人の最たる者でさえ  
公益のためには何かの役に立つことになった。

個々には不平があったとしても  
全体としては上手く治める。これこそ国家の技量である。  
音楽のハーモニーのように  
不協和音を全体として調和させている。  
(H) 敵対する者同士が、腹いせのつもりでやることが、  
互いに相手を助けることになる。  
しからば、節制や節酒が、かえって  
暴飲暴食につながることもある。

(I) 悪の根源たる強欲  
この呪われるべき性悪で有害な悪習というべき強欲こそ  
放蕩に仕える奴隷であった。  
(K) かの気高き罪、(L) それが放蕩である。  
奢侈は貧乏人を百万雇い、  
(M) 厭わしい高慢がもう百万雇った。  
(N) 羨望や虚栄心こそが  
人々を勤勞に駆り立てた。  
奇妙で馬鹿げた悪徳を絵に描いたような  
食事や家具やドレスにみられる  
気まぐれで度を越えたぜいたくが  
他ならぬ商売を回す歯車であった。  
法律も衣服も同じように  
変わりやすいものである。  
というのも、一時はよいとされていたものが  
半年もすると罪になったからである。  
法律の不備を見つけて改めたが、一方で  
思慮分別をもっても予見できないような欠陥を  
その時の気分で改めた。



かくして、悪徳は創意工夫の気を育み  
時間と精励とが相まって  
生活の利便性を高めことになる。  
(O) 真の快樂、慰安、安樂が高まることで  
(P) 貧乏人の生活でさえ  
以前の金持ちよりよくなり  
足りないものはもはやなくなった。

いずれは枯れ行く幸福の何と虚しいことか。  
至福にも限りがあり  
地上に理想をもたらすなど  
神々の力の及ばないことを知っているので、  
ブンブンうなって不満がる者どもとて、  
大臣や政府のやり方に甘んじて従っている。  
だが、失策のある度に、  
救済の手立てもなく迷う者のように、  
政治家を、陸軍を、海軍を罵った。  
一方、誰もが「詐欺は最悪だ」と叫び  
自分の詐欺行為は柵に上げて  
他人のことは容赦なく糾弾した。

自分が仕える主人や国王や貧乏人をも騙して  
王侯のごとき財産を手に入れた者が  
「欺瞞のために国が減んでしまう」と  
臆することなく大声で叫んだ。  
説教をほざくこうした悪党を咎めたのは誰だろう  
子羊の皮を子ヤギの皮と偽って売った手袋屋である。

不都合にも些細なことが片付かなかったり  
公務に支障が生じようものなら、  
悪党どもは、臆面もなく  
「何んということだ、正直でありさえすればよかったのだ！」と叫んだ。  
商業の神マーキュリー神はその厚かましさに苦笑いしたが、  
自分が好きでやっていることなのに、それをのべつ非難するのは  
無分別だと考える者もいた。  
ジュピター神は義憤に駆られ、  
ついに「ブンブンうなる蜂の巣から詐欺を一掃する」と  
怒りを込めて宣言し、これを実行した。  
たちまち欺瞞は失せて

誰の心も正直で満たされた。  
「知恵の木」のように  
目に映るものは見るも恥ずかし  
もろもろの罪で、今や無言で懺悔して、  
その見苦しさに赤面する。  
それは、子供が過ちを隠そうとしても  
心の内が顔に出るのに似ている。  
他人に顔を見られるだけで  
所業がバレたと思うのだ。

しかし、おお神よ、何たる驚き  
何という突然の激変であろうか。  
半時間も経つと国中で  
1ポンドの肉の値が1ペニーも下落してしまった。  
偽善の仮面が脱ぎ捨てられ  
大物政治家が道化師に姿を変えた。  
借り物の仮面で世間に知られた者は  
素顔になると見知らぬ者にみえた。  
その日以来、法廷は静かになった。  
いまや借り手は貸し手が忘れていた分まで進んで支払い  
貸し手は貸し手で  
借り手の借金を帳消しにした。  
悪事を働く者は口を閉ざし、  
でっちあげの濫訴を取り下げた。  
そのようなことでうまくいくことはあり得ず、  
訴訟で繁盛するのは正直な蜂の巣に住む弁護士だけなので  
十分な貯えのある者を除いて、みな  
矢立を小脇に抱えて巣を去っていった。

正義の女神は絞首刑と釈放を実行した。  
刑務所が空になったので  
処刑に立ち会う必要がなくなり  
従者を残らず引き連れて華麗に退いた。  
行列の先頭は鍛冶屋が数人  
錠前と鉄格子と足かせと鉄の扉をもって進み  
次に、看守、牢番、下働きの助手が続いた。  
女神の前方には、やや離れたところに  
忠実なる家臣にして法の最終番人であるキャッチ殿がいる。  
死刑執行人であるキャッチ殿は  
正義を象徴する剣を携えずに

己の道具である斧と綱をもっていた。  
それから、目隠しをした美しき女神が  
ふんわりと風が運ぶ雲に乗っていた。  
女神の壮麗な馬車を囲むのは、  
あらゆる階級の廷吏、刑の執行吏  
袖の下を取る警吏、その他の役人であり  
日々の糧を涙から搾り取る連中ばかりである。

病人がいる限り医業は続いたが  
腕のよい者以外、薬を処方できる者はいなかった。  
彼らは蜂の巣のいたるところにいたので  
馬車で遠くまで走り回る必要はなかった。  
無駄な議論を振舞わすことなく  
患者の苦痛を取り除く努力をし  
いんちきな国でつくられた薬は避けて  
自分の国でつくった薬を用いた。  
神は処方箋なき病を国民にもたらず  
はずがないことを知ればこそそのことである。

牧師は怠惰から目覚めて  
職務を代理に任せることがなくなった。  
悪徳に手を染めることもなく  
祈りと犠牲心をもって神に仕えた。  
聖職に不適任な者や  
自身の仕事が不要だと悟った者は残らず身を引いた。  
そんなに多くの者に仕事があるわけがなく  
(もし、正直者が必要な仕事を引き受けるときには)  
ほんの少数の者だけが主教のもとに留まり  
あとの者は恭順の意を表するのみだった。  
主教は聖務を司り  
国事は他の者に任せた。  
飢えたる者を門前払いするようなことはせず、  
貧乏人の給料をかすめ取ることもしなかった。  
主教の邸宅では、ひもじい者には食べ物  
雇われた人には有るほどのパンが与えられ、  
貧しき旅人には食事と宿が供された。

国王に仕える高位の大臣たちや  
すべての下位の官吏に  
大きな変化がみられた。(Q) つましく過ごそうと、

彼らはいまや俸給で暮らしている。  
あわれな蜂が10度も足を運んで、  
わずかな額の報酬を受け取るために、  
高給で雇われた書記に  
1 クラウン掴ませてやっとな話を通してもらうことなど  
以前なら書記の役得であったが  
いまはまぎれもなく詐欺行為である。  
当初はいかなる地位も三人で司り  
互いに悪事を監視し合い  
しばしば同僚のよしみで  
お互いの盗賊行為を助長したもののだが、  
幸い、いまは一人でやるので  
数千人もの役人が消え去った。

(R) どんな高官も借金を負って生活するとなれば  
満足というわけにはいかない。  
拝領の制服は質屋にぶら下がり  
馬車は二束三文で手放され  
すべて備えた立派な馬も田舎の屋敷も  
借金返済のために売却された。

詐欺行為を抑えるのと同じように  
無駄な費用は避け、外国に軍隊は置かず  
戦争で得た外国からの称賛も  
虚しき栄誉も、いまやただのお笑いぐさ。  
祖国のために戦うのは  
正義とか自由が危ういときだけである。

さて、壮麗な蜂の巣に目を転じて  
正直と商売がいかに折り合うかをご覧ください。  
展示会はなくなり、商品はたちまち品薄となり、  
あたりの様子は一変する。  
毎年莫大な金を使っていた客が  
姿を消しただけでなく  
彼らの金で生計を営んでいた多数の人が  
日ごとに街から出て行かざるを得なくなった。  
商売を替えても無駄であり  
過剰な在庫を抱えるだけであった。

土地や家屋の値は下がり

古代都市のテーベの宮殿のような壁を有する  
壮麗な邸宅は、劇場に生まれ変わったりしたが、  
いにしへの賑わいは失せて、いまは貸家となっている。

鎮座給いし守護神は  
扉につけられたみすぼらしいお札を  
あざ笑われるくらいなら  
いっそ炎に包まれて死にたかろう。  
建築業はまったくだめになり  
職人は仕事がなく  
(S) 名の知れた意匠師もいなくなり  
石工や彫刻師の名を聞くこともない。

そこに留まる者も節制に励むようになり  
金の使い方ではなく、暮らしの工夫に務める。  
居酒屋の勘定を支払ったあとは  
もう二度と足を踏み入れまいと決心する。  
蜂の巣のどこの酒場女も金糸織の服などをまとめて  
景気よくやることもできず、  
かのトーコルなる食通が、ブルゴーニュやオルレアン<sup>4)</sup>  
といった銘酒に大金をはたくこともない。  
なじみの店で愛人とクリスマスディナーを取り  
騎兵中隊を一日雇い得るほどの金額を  
二時間で使う廷臣はもういない。

高慢なクローエ<sup>5)</sup>は豪勢に暮らすために  
(T) 夫をつついて国の金をくすねたが、  
いまやインド諸国を探し回って  
手に入れた家具を売りに出し、  
高価な食事代を削って  
一年中丈夫な服を着ている。  
軽薄で気まぐれな時代は終わりを告げ、  
衣装も、他の流行りもの同様に変わることがなくなった。  
高価な絹に金銀を織り込む機織り職人も  
それに連なる商売もいまはみな  
消え失せた。平和と豊かさが国を覆い  
すべてのものが質素だが安価である。  
心やさしい自然は庭師の手を離れ  
あらゆる果実をありのままに任せて実らせている。  
だが、何の苦勞もしなければ  
珍しいものは手に入らない。

高慢と奢侈が薄れるにつれて  
しだいに、海外との取引もなくなる。  
いまや商人のみならず業界あげて  
すべての製造工場を取り払っている。  
あらゆる技芸や工芸は見捨てられ  
(V) 現状に甘んじる安逸が産業をすたらせ、  
当たり前のものだけで満足するようになり  
ぜいたくを求める者はいない。

巨大な巣に残る者はわずかであり  
多数の敵の攻撃に対して  
彼らの百分の一も持ち堪えられない。  
それでも彼らは勇敢に抵抗し  
堅固な避難所を見つけて  
そこで死ぬか持ち堪えるかのいずれかだ。  
彼らの軍隊は傭兵を募らず  
祖国のために勇気をもって  
勇敢にかつ全力で戦い  
ついには勝利の栄冠を手にする事ができたが、  
勝利のために多くの犠牲が払われ、  
何千という蜂が命を落とした。  
苦勞と修練で鍛えられた彼らは  
安楽それ自体を悪徳とみなした。  
かくして、節制が一層促進され  
ぜいたくを避けるために  
木のうろに浸りこんで住まいとした。  
清貧と正直に祝福あれ。

#### 教訓

それでも、不平不満は残る。正直に包まれた蜂の巣を  
(X) 広大な巣にしようとするのは、愚か者の所業である。  
(Y) 世の便益は享受し  
戦争で名をあげながら、かつ世にはびこる  
悪徳に染まることなく安楽に暮らしたいなどは  
頭の中に巣くう絵空事である。  
欺瞞、奢侈、高慢は  
利益をあげるためにあらねばならぬものである。  
たしかに、空腹は恐ろしい災いであるが

空腹なしに美味しく食べ、元気に暮らす者などいようか。  
ワインができるのは、干からびて不器用に  
曲がりくねった蔦からではないのか。  
若芽を手入れしないでいると  
他の植物を枯らし樹木を覆ってしまうが  
手をかけたり束ねて刈り込んだりしてやれば  
みごとな実を実らせる。  
それゆえ、正義によって縛りと制御をかけてやれば、  
悪徳も利益を生み出す土台となる。  
国民が豊かでありたいと思うことは、  
物を食べるのに空腹が必要なように  
国家にとって必要不可欠なことである。  
徳性だけでは国民を活気づけることはできない。  
黄金時代の輝きをよみがえらせたいなら、自由が必要だ。  
どこに転がろうと、どんぐりの自由にさせてやるのと同じように  
正直にも自由があらねばならない。

おわり<sup>6)</sup>

### 3 17世紀後半のイギリスと奢侈的風潮

#### (1) 「ブンブンうなる蜂の巣」に描かれたイギリス

バーナード・マンデヴィルは、1670年にオランダに生まれている。ライデン大学で医学博士の学位をとる一方で哲学も学んでいる。その後、ロンドンに渡り、医者として開業し永住することになる。マンデヴィルは医師として活動する傍ら、当時の社会事象に関する著作を数多く発表している。その1つである長編の『詩』、『ブンブンうなる蜂の巣』が書かれたのは1705年である。それは、貿易の拡大を背景に隆盛する商業活動によって繁栄を極めた当時のイギリスにおける風俗刷新運動を風刺したものである。後に『詩』とそこに付けられた注釈をまとめた『蜂の寓話』と題する著作が宗教・道徳を重視する人々の目に留まり、激しい非難を受けることになる。

本節では、マンデヴィルが『詩』に描いた当時のイギリスにおける消費生活の様相とそれを生み出した奢侈に関するさまざまな意見の交錯について見ておく。マンデヴィルが蜂の巣を借りて描写した当時のイギリスはどのような状況にあったのであろうか。『詩』の冒頭にある

ある大きな蜂の巣があり、  
贅沢で安楽に暮らす蜂が群れていた。  
若い蜂の大群を生み出すことで有名であったが、  
法による統治と武力を備えていることでも知られていた。

という一節と、中段にある、

他の巣からは、平時にはこびへつらわれ、  
戦時には恐れられ、尊敬の的でもあった。

という記述により、強力な武力を背景に、貿易を拡大しながら植民地を増大させていく大帝國としての当時のイギリスの姿を想像することができる。

マンデヴィルの見た17世紀後半のイギリスは、名譽革命を経て、民主主義的な政治体制の下で自由な経済活動を拡大させていく時期にあった。貿易相手国がそれまでのヨーロッパ諸国から、アメリカ、アジア、アフリカへと拡大されるにつれて、いわゆる三角貿易を通じて取引される商品が増大していった。と同時に、紅茶、砂糖、コーヒー、たばこ、ぶどう酒、絹製品、綿製品などがイギリスにもたらされるようになる。そうした商品の消費は人々の生活を大きく変化させ、消費革命と称されるほどの繁栄をもたらすことになる。まさに、マンデヴィルが活動した当時のイギリスは、貿易による繁栄を謳歌していたのである。国内外における取引の増大は、イギリスの経済をますます豊かにしていく。その当時のイギリスがいかに豊かで発展した国であったかを、『詩』では、

そこには、我々も持たないような動力機具、労働者、  
船舶、城郭、武器、熟練工、  
工芸、城郭、作業道具などがある。  
いや、実に何でも備わっていた。

と表現している。経済的繁栄は、人々の所得を増大させる。生活水準が向上するにつれて消費が飛躍的に拡大していく。とくに、コーヒー、紅茶、砂糖、絹などの奢侈品が増え、賃金上昇、人口増加と相まって国内市場を一層拡大させていく。消費需要が生産を促し、それが労働需要を拡大し、賃金上昇、所得増大を生み、それがさらに消費を増大させるという経済的好循環を作り出すことで、イギリスは繁栄を極めることになる。

## (2) ダニエル・デフォーの見たイギリスの消費社会

当時の人々の消費生活について、マンデヴィルと同時代を生きたダニエル・デフォー（1660～1731）は『イギリス経済の構図』（Defoe, 1730）の中で、「生活様式は鷹揚な上に贅沢で、虚栄的であるとともに濫費とさえ思われるほどに出費が多い。国民の気質は陽気な上に見栄っばりで、悪徳にふけり、そして不節制に満ちている。そのあるものについては犯罪にすらなりかねないほどであり、またその度合は、すべての面で極度に高まっている。」（Defoe, 1730, 邦訳, p.180）と記している。そこには、当時のイギリスでは、消費による過度な贅沢が風紀の乱れさえ生じさせていることが示唆されている。ただし、デフォーはこうした消費社会の繁栄のおかげで、「貧しい人々とか日雇い人、また労働し、苦役に服する人たちとよぶこれら一連の労働者ですらそうなのであり、彼らは温かいところに休み、豊かに暮らし、激しく働き、そして欠乏を知らず、（また知る必要もない。）」（Defoe, 1730, 邦訳, p.103）のであるとして、経済的な繁栄が貧しい人々の生活水準さえ引き上げていることを指摘している。マンデヴィルはこれに関して、『詩』の中で、



真の快樂，慰安，安樂が高まることで，  
貧乏人の生活さえ，以前の金持ちよりよくなり，  
足りないものはもはやなくなった。

と記述している。こうしたイギリスの繁栄を端的に表していたのがロンドンであった。当時のロンドンは世界の各地から集まるさまざまな商品を取引する市場であり，トーマス A. ホーンが言うように「オランダの港を凌ぎ，ヨーロッパの中で最も繁栄する港であった。」(Horne, 1978, 邦訳, p.77)

消費を謳歌するイギリスは，当時として奢侈品であった紅茶，コーヒー，砂糖，絹が大衆にまで浸透し，婦人たちは競って贅沢な衣装を身に着けようと出費を重ねていた。消費社会の繁栄を象徴するように衣装の流行やモードを追い求める社会の風潮について，マンデヴィルは『蜂の寓話』の中で，「織屋，靴屋，仕立屋，床屋，あるいはその他のすべてのしがない職人たちは，僅かなお金しか稼げないのに，稼いだなけなしのお金で職人だてらに資産ある貿易商のような衣服を纏う。…そのような卑しい連中の厚かましさに耐えきれない貿易商の婦人たちは，厚かましい連中から避難する」(Mandeville, 1714, 邦訳, p.108) 一方，「上流階級の女性たちも貿易商の妻や娘が自分たちと同じような衣装で装っているのを見てびっくり仰天し，庶民のこうした厚かましさに我慢できないと叫ぶ。こうして婦人服裁縫士が呼びにやられることになり，厚かましい庶民が流行を模倣し始めるとすぐに，いつでも新しい流行を創始できるようにいろいろ考案することが彼女たちの最も大切な仕事となる。」(Mandeville, 1714, 邦訳 p.108) と述べている。ここに描かれている当時の婦人たちの行動は，マンデヴィルの『詩』からおよそ 200 年後の 1899 年にヴェブレンの書いた『有閑階級の理論』(Veblen, 1899) の中で消費行動を表すキーワードとなった「顕示的消費」そのままである。いつの時代も，こうしたあくなき欲求の追求こそが，消費社会を繁栄させる原動力となる。飲食に，衣装に，建物に，家具にと，あらゆるものに人々の欲望は留まるところを知らない。それがデフォーの見た，そしてマンデヴィルの見たイギリスであった。

### (3) 風俗刷新協会の活動

しかしながら，大衆消費は社会の繁栄をもたらす一方で，社会問題も引き起こす。その典型的な例が飲酒による犯罪や非道徳的行為の発生である。これについて，デフォーは「ここイギリスでは，ブランデーと同じくブドー酒も，そしてすべてのわれわれの強い混合酒，たとえばスタット・エール，ポンチ，ダブル・ビール，ファイン・エールなどあらゆるものが度を過ぎて飲まれ，それもわれわれの健康のみでなく道徳心に対しても害となるほどにまで飲まれている。」(Defoe, 1730, 邦訳, p.182) として，飲酒のもたらす問題を指摘している。飲酒の中でも，「ジン」による悪影響は深刻な問題であった。ジンは主に下層階級の人々に飲まれたが，それは健康を害し，犯罪を誘発し，労働力を損なうことにさえなったのである。

これについては，マンデヴィルも『蜂の寓話』の中で，「貧民の健康にとっても，また彼らの元氣や勤労にとっても，あの忌まわしい酒（ジン）よりも有害なものはない。」(Mandeville, 1714, 邦訳, p.75) 「この酒によってひっきりなしに引き起こされている食欲の減退，発熱，黒くなったり黄色くなったりする黄疸，痙攣，結石症や尿石症，浮腫症，そして粘液性浮腫などの多くの病気については看過することはできない。」(Mandeville, 1714, 邦訳, P.76) さらに，

「ロンドン市街や郊外のいたるところに存在する夥しい数の店は、…アルコール度の強い酒の乱用が直接的な原因となっている怠惰、酩酊、困窮、悲惨などすべてをもたらし増加させる手助けをしている。」(Mandeville, 1714, 邦訳, p.77)として、飲酒の弊害を問題視している。消費社会の繁栄の裏側では、庶民生活の荒廃が大きな問題となっていたのである。

イギリスの繁栄は、奢侈や逸楽の風潮を生み出したが、飲酒問題に象徴されるような人々の行動は、キリスト教にとって美德とされた勤勉、質素、節約に反するものであった。そのために、聖職者や有識者の間に社会的秩序を乱すことに対する批判が高まることになる。その結果、17世紀後半から「風俗刷新協会」が設立されるようになり、それを通じて、社会の浄化を図る運動が展開されることになる<sup>7)</sup>。この協会による風俗刷新運動は、売春禁止、飲酒の節制、安息日の厳守、などを目標として奢侈逸楽の風潮を改めようとする一種の国民運動であった。キリスト教の下では、奢侈、怠惰、貪欲、高慢、虚栄は悪徳であると考えられたのである。

マンデヴィルの社会評論の根底にある社会思想および経済思想に影響を与えたものを丹念に検証しているホーンは、「1690年代中葉、バーナード・マンデヴィルがヨーロッパ旅行を終えてロンドンに到着したとき、粗野な風俗を改革し、国民の間に広がっていた忌しい邪悪な行為を規制しようとして組織された企画が進行中であることを彼は知った。」(Horne, 1978, 邦訳, p.1)と述べている。まさに、マンデヴィルは奢侈的消費が拡大する一方で、それを抑制しようとする運動が広がりを見せるイギリス社会のただ中にいたのである。マンデヴィルの『詩』にも当時のイギリス社会の醜悪ともいべき側面が描かれている。

詐欺師、食客、女衒、博打打ち、  
スリ、贋金づくり、偽医者、エセ易者…

こういう輩は悪党と呼ばれたが、そうした呼び方はさておき、  
堅気の者も同じようなものであった。  
いかなる職業にも詐欺はつきものであった。  
不正のない商売はなかったし、そんな場所もなかった。

さらに、当時のイギリス社会の上層部に位置する弁護士、医師、僧侶、官吏たちでさえ、その実態は、悪徳弁護士、算術優先の医師、欲に駆られるエセ僧侶、賄賂を強要する官吏、としてマンデヴィルの風刺の対象となっている。しかも、こうした不行跡は上流階層だけではなく、社会全体に蔓延していた。それは、

詐欺行為を残らず列挙するなど無理な話である。

という過激な言葉で表されている。この点でいえば、「マンデヴィルは悪徳、墮落、詐欺がはびこっているという認識では、協会（風俗刷新協会）と同一の見解をもっていた」(Horne, 1978, 邦訳, p.9)のである。このように、当時のイギリスは繁栄と奢侈逸楽が同居する世界であったといえる。

その浄化のために、風俗刷新運動が実施され、協会員たちは酒場を調べ、禁酒を実行させるために彼らの権限を行使した。しかしながら、浄化運動は成功したとは言い難い。奢侈の禁止

や質素儉約の奨励は意図したほど実効が上がりなかった。そこには、聖職者の中でも見解の対立があり、さらには法律上の不平等の問題もあった、

治安判事は下層階級に対しては厳しく取り締まったが、上層階級の反道徳的行為は大目にみるという法律の施行上の不平等があった。これは、マンデヴィルの見た当時のイギリス社会のもう一つの問題でもあった。それは法律の階級的差別とでもいうべきものである。これに関して、マンデヴィルは公平に見える正義の女神について、次のように書いている。

だが、世間の目には女神の剣は  
貧しくて、自暴自棄のものだけを突き刺すように見えた。  
そうした者たちは、窮乏に追い込まれたばかりに  
哀れにも絞首台に縛り付けられた。  
それはそんな不運に会うべき罪ではなく、  
ただ、裕福でお偉い方々を守らんがための犠牲者なのである。

ここで言う貧しくて自暴自棄の者とは下層の労働者であり、不当に低い賃金のもとに、

食うために体の続く限り手足をすり減らしている

という不遇な働きバチである。当時のイギリス社会では、たとえわずかなものであろうと、庶民が支配階級の財産に手を出すことは、それが貧しさゆえの罪であったとしても、極刑をもって臨むことで社会の秩序が保たれると考えられていたのである。

また、法律を施行し下層階級に模範となるべき治安判事自身、あるいは聖職者自身が私生活において醜行をほしいままにしていたこともマンデヴィルの風刺の格好の標的となる。法律は下層階級を取り締まるためであり、上層階級は取り締まりの対象ではなかったというのが現実であった。マンデヴィルは、『詩』の中で、それを、

公平なことで名高い正義の女神といえども、  
目隠によって損得の意識まで覆い隠されることはない。  
女神は金で買収されて左手に持つ  
はずの天秤をしばしば落とした。

と風刺した。さらに、ここにみられる構造的腐敗ともいうべき惨状とそれを改めようとする行動の中にある欺瞞は、マンデヴィルの格好のターゲットになる。いわく、

一方、誰もが「詐欺は最悪だ」と叫び  
自分の詐欺行為は柵に上げて  
他人のことは容赦なく糾弾した。

自分が仕える主人や国王や貧乏人を騙して  
王侯のごとき財産を手に入れた者が

「欺瞞のために国が減んでしまう」と  
臆することなく大声で叫んだ。

こうした現実の前では、風紀刷新の運動が人々の支持を得て成功するのは無理なことであったと思われる。マンデヴィルは、イギリスの現状を認識しながらも、それを宗教倫理の立場から刷新しようとする風潮に対して厳しい批判の目を向けることになる。これに関しては、とくに、マンデヴィル自身の、人間に対する独特の理解とイギリスが近代という新たな時代を迎え経済的繁栄が重視される時代に入ったという認識に注意する必要がある。

#### 4 マンデヴィルの経済思想

##### (1) 欲望と経済活動

マンデヴィルは、社会の乱れに乗じて下層階級の人々に節制を強要する上層階級の欺瞞を蜂の巣を舞台にした詩の形を借りて風刺した。それは、社会的倫理の面から悪徳をただすというもっともらしい主張の矛盾を突くものであったが、マンデヴィルは上層階級の人々の言うこととやっていることの違いに厳しい目を向けたこと以上に、奢侈の経済的効果に注目していた点に注意すべきであろう。問題は宗教・道徳ではなく経済だということである。

マンデヴィルは、人間の欲望こそ経済活動の原点であり、それこそが経済の繁栄にとって不可欠な要素であることを強調する。マンデヴィルは、『蜂の寓話』の「一 緒言」において、「人間の本性というものを考察しようとする者には、人間を社会的動物たらしめているものは、人間の交際への愛好、気立ての良さ、憐憫の情、人付き合いの良さ、あるいは、公正を装う外見上の高潔さなどではなく、人間の最も卑劣で、最も嫌悪すべき性質が人間を偉大な社会に、世間流に言えば、最も幸福で最も繁栄している社会に相応しい存在にするためにも最も必要な資質であることを理解されるであろう。」(Mandeville, 1714, 邦訳, p.1) と述べ、注釈の中でも、「人間というものは、欲望によって衝き動かされないかぎり決して努力することをしない。…人間社会を偉大なものにしたいのであれば、人々の情念を刺激しなければならない。」(Mandeville, 1714, 邦訳, p.154) として、強欲、虚栄、放蕩、自己顕示欲といった悪徳こそ人間の本性であり、それが消費を衝き動かす原動力であるとみている。こうした悪徳は、道徳の視点から見れば低劣で卑しむべきものであり、倫理規範に照らしても非難されるべきものであろう。しかし、それを消費の拡大という面からみると、そこに新たな意味を見出すことができるというのがマンデヴィルの主張である。贅沢な消費財を求める放蕩は、強欲によって世の中からかき集めた富を再び世の中に返す行為であり、しかもその過程で数多くの財が生産されるために、多くの人が働き口を得ることができる。しかも、その過程において市場は量的に拡大するだけでなく、その質をも高めることになる。生産が拡大する過程で、技術が改良され、生産性が向上することにより、産業は一層発展することになる。これをマンデヴィルは次のように表現している。

かくして、悪徳は創意工夫の気を育み  
時間と精励が相まって  
生活の利便性を高めることになる。

産業が発展し、仕事が増え、所得が増加することで、社会は放蕩の恩恵を受けることになる。そこには、私悪が公共の利益となるというロジックが示されている。

奢侈は貧乏人を百万雇い、  
厭わしい高慢がもう百万雇った。  
羨望や虚栄心こそが人々を勤勞へと駆り立てた。

### (2) ハチスンの奢侈的支出に対する批判

風俗刷新協会の活動に見られるように、過度な贅沢は道徳的側面から非難されるべきものであるが、経済の視点からも賛否両論があったことは注目に値する。マンデヴィルの奢侈の奨励ともいうべき主張に批判的であったのは、グラスゴウ大学でアダム・スミスの師であったフランシス・ハチスンである。ハチスンは、マンデヴィルの主張に対して道徳の面から反対するだけでなく、経済分析の観点からもそれを批判している。その基本的な視点は、悪徳が社会の繁栄をもたらすために必要であるとか、公共の福祉は必然的に悪徳を生み出すことなどありえないというものであった。ハチスンは、悪徳がなくても製造品に見合った消費は存在するのであり、奢侈に消費されない所得は、有益な思慮分別のある目的に使われることになることを主張した。それは、たとえ奢侈的支出が奨励されなくても、有効需要は十分に確保されるというものであった<sup>8)</sup>。

こうした見方は、アダム・スミスに引き継がれることになる。スミスは『国富論』において、労働によって生み出された生産物こそ国民の富であると考えたが、それを増加させるのは、分業による生産性の向上と貯蓄による資本蓄積であると主張した。スミスは、貯蓄にもとづく資本蓄積が労働雇用の増加を可能にし、それが生産の増加を可能にすることで国を豊かにすることができると考えた。そこから、節約は美徳という考え方が生まれることになる。こうした見方は、質素、節約を旨とするキリスト教の倫理とも両立するものであったと考えられる<sup>9)</sup>。

アダム・スミスのこうした見方は、総需要と総供給は市場における自動調節作用によって完全雇用の水準で均衡するという想定に基づくものである。この市場メカニズムの機能についてのスミスの考察は、貯蓄されたものは市場を通じて投資されるために有効需要の不足は生じないという、スミス以降の古典派経済学の教義の基礎となる。市場がそのように機能するとすれば、奢侈による道徳的に墮落した消費に頼ることなく生産水準の維持が可能になる。スミス以降、約100年に渡って主張されてきたこの古典派経済学の教義が覆され、たとえ奢侈であろうとも、需要こそが経済の繁栄を支えるというマンデヴィルの主張がケインズによって再評価されるのは<sup>10)</sup>、1776年にスミスの『国富論』が書かれてから160年後のことである。

### (3) バーボンとノースの奢侈擁護論

奢侈を奨励するようなマンデヴィルの『蜂の寓話』は、主に道徳的観点から多くの批判を受けたが、マンデヴィル以前にも奢侈の経済的効用を擁護する人たちがいた。その一人はニコラス・バーボンである。バーボンは、1690年に『交易論』(Barbon, 1690)を著し、外国貿易により各国の国産貨物を交換することで、それぞれの国の生産が拡大され、雇用が増加することにより互いに豊かになることができると主張している。そのためには、国内消費の拡大が必要になるが、これに関してバーボンは、人間には新奇なものを求める欲求があり、それは生活の

基本的な必要を超えるぜいたく品に対する需要を生み出す傾向があると指摘する。すなわち、「精神上の欲望は無限である。人間は生まれつき向上を望み、そしてその精神が高尚となるにつれて、かれの感覚も一層洗練されたものとなり、また一層喜びの能力をもつようになる。かれの願望は拡大され、かれの欲望は意欲 Wishes と共に増大する。意欲とはすべて珍奇なものを求めるものであって、かれの感覚を満足させ、かれの身体を飾り、そして生活の安易、愉楽および栄華を増進することができるものである。」(Barbon, 1690, 邦訳, p.17) 一方、もし徹底して金を貯めこむといったどん欲によって浪費が抑制されるなら、「人間の用のために調べられた財を消費しないことによって、売れぬ資財 dead stock 一いわゆる Plenty が生じ、それらの財の価値は下落し、どん欲な人の財産は、土地の形であろうと貨幣の形であろうと、値打ちの一層少ないものとなる。」(Barbon, 1690, 邦訳, p.45) と述べている。マンデヴィルの世界では、道徳面から消費が抑制されることで経済が衰退すると想定されたが、バーボンも奢侈を回避する、吝嗇という意味での人間のどん欲が同じ結果をもたらすと主張している。

次いで、1691年にイングランドの商人であり、経済理論家でもあったダドリー・ノースが『交易論』(North, 1691)を書き、その中で、「奢侈禁止法を有する国々は一般に貧しい。」(North, 1691, 邦訳, p.40)と述べた上で、「或る商人はかれの隣人が四頭立ての馬車を駆っているのを見ると、ただちに全力をあげて同様のことをしようとして活動をはじめた。そしてそのために往々貧乏になることがある。しかしながら、虚栄心をみたそうとしてかれが示す異常な傾向は、かれ自身にとっては、かれのとった誤った方策に十分応えることがないとしても、社会にとっては利益になる。」(North, 1691, 邦訳, p.40)と記している。これも私悪が公益になるというマンデヴィルの発想と同じものであるといえる。

(N) 羨望や虚栄心こそが

人々を勤勞に駆り立てた。

奇妙で馬鹿げた悪徳を絵にかいたような

食事や家具やドレスにみられる

気まぐれで度を越えたぜいたくが

他ならぬ商売を回す歯車であった。

#### (4) マンデヴィルの有効需要論

「交易論」をベースにしたバーボンやノースの奢侈擁護論は、マンデヴィルの『蜂の寓話』に継承され、奢侈の社会的な必要性が一層強調されることになる。しかしながら、マンデヴィルの表現がイギリス社会を中傷するものと受け取られるような内容であったこともあり、厳しい批判に晒され、ミドルセックス州大陪審から告訴される事態に至った。これに対応するために、マンデヴィルは弁明に追われることになる。たしかに、『詩』に注釈を加えた『蜂の寓話』は、論争を巻き起こした点では問題の書であったといえようが、これを経済学説史の観点から見ると、そこには後世の経済学において展開されることになる、きわめて重要な経済原理が示されていることにも注目する必要がある。

その一つは、ジョン・メイナード・ケインズの「有効需要の原理」である。18世紀以降、景気変動を繰り返しながら発展を続ける資本主義経済が未曾有の危機的状況を迎えるのは、1929年のニューヨークにおける株価の大暴落に端を発する大不況である。これはまさに市場

経済を崩壊に導きかねないような資本主義経済史上最大の危機であった。この危機に際して、経済を不況に追い込む市場経済の減衰は有効需要の不足にその原因があるとして、それまでのアダム・スミス以来のいわば供給重視の古典派経済学の思考を大転換させたのがケインズであった。ケインズは1936年に『雇用・利子および貨幣の一般理論』(Keynes, 1936)を著し、「有効需要」こそ市場経済の帰趨を決する要因であると主張した。それは当時の経済学に「ケインズ革命」と称されるほどの衝撃を与えるものであった。この『一般理論』の中で、ケインズは有効需要の重要性を指摘していた歴史上の人物としてマンデヴィルを取り上げ、その先見性を評価している<sup>11)</sup>。

有効需要が激減するとき、経済は不況に陥らざるをえない。現実の経済において、それを端的に表したのが1929年の株価の大暴落であった。これをきっかけにあらゆる物の価格が下落し、生産は減少し、失業者が街にあふれた。1930年代前半にはアメリカの失業率は実に25%に達したといわれている。マンデヴィルは『詩』の中で、同じ現象が起こる可能性を指摘している。不正直な振る舞いに怒ったジュピター神により消費を生み出す源泉ともいふべき悪徳が排除されたなら、それは消費を一挙に収縮させることになる。その結果はどうなるであろうか。

何と突然の激変であろうか。

半時間も経つと国中で

1ポンドの肉が1ペニーも下落してしまった。

毎年莫大な金を使っていた客が

姿を消しただけでなく

彼らの金で生計を営んでいた多数の人が

日ごとに街から出ていかざるをえなくなった。

商売を替えても無駄であり

過剰な在庫を抱えるだけであった。

需要が減少することにより、物価が下落し、あらゆる産業が衰退し、社会は豊かさを失ってしまう。需要の確保こそ経済繁栄の基本であるという見方こそ、ケインズの有効需要の原理と同じものであったといえる。

##### (5) マンデヴィルの市場認識とアダム・スミス

マンデヴィルは、私悪にもとづく消費が経済を繁栄させるという意味で公益をもたらすと主張したが、この私悪が公益をもたらすというロジックが、アダム・スミスが『国富論』(Smith, 1776)の中で展開した市場についての説明と同じである点も重要である。マンデヴィルが、私悪に基づく奢侈とそれがもたらす経済的繁栄について、

かように、ひとつひとつを見れば悪徳に満ちていたが、

全体としてみればまさに天国であった。

というとき、それは、経済学の父といわれるアダム・スミスが1776年に著した不朽の大著『国

富論』の次の一節に符合するものである。すなわち、「各人が社会全体の利益のために努力しようと考えているわけではないし、自分の努力がどれだけ社会のためになっているかを知っているわけでもない。…だがそれによって、その他の多くの場合と同じように、見えざる手に導かれて、自分がまったく意図していなかった目的を達成する動きを促進することになる。」(Smith, 1776, 邦訳, 下, p.31)

自己の利益を求めて活動することが、市場を通じて社会全体を繁栄させることになるのであり、「私悪すなわち公益」である。交易により繁栄をきわめたマンデヴィルの時代と資本蓄積による生産力の拡大が求められたスミスの時代では、経済活動の重点は異なるが、利己心にもとづく活動が市場の拡大を促し、それが生産を拡大させるというマンデヴィルの発想は、経済の発展のために市場での自由な活動を重視したスミスと同じである。

スミスは、経済の発展のために「分業」のもつ役割を重視したが、『国富論』第一編、第二章「分業の起源」において取引と交換に必要なこととして、次のことを指摘している。「人はほぼいつでも他人の助けを必要としており、他人の善意だけに頼ってはい、助けを得られると期待することはできない。相手の利己心に訴える方が、そして自分が求めている行動をとれば相手にとって利益になることを示す方が、望みの結果を得られる可能性が高い。」(Smith, 1776, 邦訳, 上, p.17) ここにも、私悪が公益をもたらすというマンデヴィルの発想との類似を見ることができよう。マンデヴィルの『詩』の最後の一節は、スミスと同じように、自由な市場こそ経済の繁栄にとって重要であるとの言葉で締めくくられている。

黄金時代の輝きをよみがえらせたなら、自由が必要だ。

どこに転がろうとどんぐりの自由にさせてやるのと同じように

正直にも自由があらねばならない。

これは、『国富論』の約70年前に書かれたものであることに注目する必要があるだろう。マンデヴィルはアダム・スミスと同様に市場における自由な経済活動こそが社会を繁栄させるとして、その規制に反対した。私悪である欲望の発露は社会を富ませるという意味で公益をもたらすということである。

## (6) マンデヴィルと政府

しかし、マンデヴィル自身が『詩』の中で指摘するように、世の中の経済活動には不正のないものなどありえない。そうだとすれば、経済活動を何の制約もなしに個人の自由任せるときに、それがどうして社会に混乱を生じないといえるのであろうか。スミスは、利益を求める個人の活動が市場メカニズムを通じて社会を豊かにするとき、そこには「見えざる手」が働くと言ったが、そこに想定されていたのは需要と供給についての価格の自動調節作用<sup>12)</sup>と、そこで活動する人々への信頼であったといえる<sup>13)</sup>。

これに対し、強欲ともいえる個人の欲望が経済活動を回す歯車であるとするマンデヴィルが社会の調和を期待したのは政府に対してであった。マンデヴィルは、詩の冒頭で、蜂の巣に暮らす蜂たちの住む世界について、

彼らは、専制政治の奴隷ではなかったし、



粗悪な民主政治に支配されることもなかった。  
国王に苦しめられることもなかったが、それは、  
国王の権力が法律によって制限されていたからである。

と述べ、当時のイギリスが立憲君主制のもとで自由な経済活動ができる状況にあったことを示している。その上で、詐欺が横行する中で、人々が豊かになっていくとき、そこには政府による絶妙な調整が働いていることを指摘している。すなわち、

個々には不平があったとしても  
全体としては上手く治める、これこそ国家の技量である。  
音楽のハーモニーのように  
不協和音を全体として調和させている。

これがマンデヴィルの考える国家の役割りであるということができよう。アダム・スミスは見えざる手による市場の自動調整作用を理論的に展開することにより、市場への政府の介入を最小限に抑える自由放任主義的思考方を支持したが、これとは反対に、マンデヴィルは経済活動における政治の役割に大きな期待を寄せていたとみられる。『蜂の寓話』の「一 緒言」において、「皆が、一緒になってよく統治されている健全な社会を作り上げられうるのは、社会の構成員の持つ邪悪さであることを明らかにするためのものに過ぎない。つまり、こうした風刺は、社会という大変すばらしい組織を最も見下げ果てた部分から作り上げるという、政治的知恵の驚くべき力を称賛するためになされたものなのである。」(Mandeville, 1714, 邦訳, p.2)と述べている。

それゆえ、正義によって縛りと制御をかけてやれば  
悪徳も利益を生み出す土台となる。

として、政治による社会の調整に大きな期待を寄せている。また、貿易政策に関する注釈(L)においても、「あらゆる政府というものは、当然にも国の利害に精通しており、また、それを断固として追求すべきである。巧妙な政治手腕を用いて、ある商品には重税を課したり、あるいはそれらの商品を全面的に禁制品にしたり、さらには、他の商品の税を軽くしたり、また彼らが望む方向に貿易航路を変えるであろう。」(Mandeville, 1714, 邦訳, pp.95-96)と述べ、政府が経済活動に果たす役割を重視している。しかも、それはアダム・スミスと異なり、理論的な思考の結果ではなく、現実的かつ実際的な必要性に基づくものである。

その背景には、イギリスを含めて、当時のヨーロッパ諸国で行われていた重商主義政策の影響もあったと考えられる。輸出が輸入を上回ることにより、より多くの金・銀を自国にもたすことができる。そのためには、政府による輸出入の管理が必要とされたということである。さらに、イギリスやオランダにみられるように国王や貴族の支配から市民による活動へと社会の中心が変化していくとき、そこに政治による社会の管理・調整が求められたのであり、政治家が市民社会における社会管理のための一つの職業となっているという現実があった、という面にも注意する必要がある。

## 5 おわりに

マンデヴィルは『蜂の寓話』の「一 緒言」において、この本の目的を次のように書いている。「この童話の主たる意図は、(寓話の「教訓」のところで少し触れておいたように) 勤勞で豊かで強力な国家において見いだされる、この上もなく快適な生活を享受しながら、同時にあの黄金時代においてのみ可能な美德を身につけ、無垢な状態であることは不可能であることを示すことにある」(Mandeville, 1714, 邦訳, p.3) つまり、その目的は、

(Y) 世の便益は享受し  
戦争で名をあげながら、かつ世にはびこる  
悪徳なしに安楽に暮らしたいなどは  
頭の中に巣くう絵空事である。

ことを示すことであった。

マンデヴィルが『蜂の寓話』を書いた18世紀初頭は、まだ産業革命が起こる前であったが、イギリスはすでに交易を通じて繁栄をきわめていた。

若い蜂の大群を生み出すことで有名であったが、  
法による統治と武力を備えていることでも知られていた。  
そこは学術と産業を育てる  
偉大な苗床とみなされていた。

という説明が示唆するように、すでに豊かな産業社会が築かれていた。しかも、

他の巣からは、平時にはこびへつらわれ、  
戦時には恐れられ、尊敬の的でもあった。  
富も命も惜しまなかったので、  
他のすべての蜂の巣と対等に渡り合えた。

という記述からもわかるように、当時のイギリスは経済大国であると同時に軍事大国でもあった。こうしたイギリスの現実を前にして、マンデヴィルは植民地を拡大し、商業取引により各種の消費財が流入する中で繁栄する豊かな社会の維持に消費が大きな役割を果たしていることに注目した。奢侈は道徳的視点から見れば悪徳であり、キリスト教的倫理の下では戒めるべきものであろう。しかし、すでにイギリス社会は消費が外国製品だけでなく国内の生産物の生産を支えていたのであり、それは製造業も商業も拡大させ、雇用を増し、賃金を引き上げ、消費をさらに拡大させるという循環を生み出す。そこには、いわば「消費が消費を呼ぶ」という形で経済の繁栄が展開されているのである。この消費の経済的役割に注目するとき、それを道徳的視点から抑制し、質素、儉約が求められたなら、そこに待っているのは経済的惨事であることを詩の形で風刺したのである。

高慢と奢侈が薄れるにつれて  
しだいに、海外との取引もなくなる。  
いまや商人のみならず業界あげて  
すべての製造工場を取り払っている。  
あらゆる技芸や工芸は見捨てられ  
(N) 現状に甘んじる安逸が産業をすたらせ、  
当たり前のもので満足するようになり、  
ぜいたくを求める者はいない。

ここには、1929年のアメリカの株大暴落が引き金となった大不況と同じような状況が描かれている。ただし、マンデヴィルの世界での不況の原因は宗教的な奢侈抑制によるものである。その結果、

かくして、節制が一層促進され、  
ぜいたくを避けるために  
木のうろに浸りこんで住まいとした。  
清貧と正直に祝福あれ。

という結末になる。この最後の1行は、樽を住みかとしたといわれる古代ギリシャの哲学者ディオゲネスを連想させる一文である。

マンデヴィルは、『蜂の寓話』全体を通して、個人の「悪徳」が経済の繁栄にいかにも必要であるかを説いた。ただし、いうまでもなく、マンデヴィルの悪徳は反社会的なものではない。少なくとも犯罪を想定したものではない。マンデヴィルのいう悪徳は、営利欲であり、奢侈であり、虚栄的消費である。これらは反社会的な行為ではなく、却って経済的繁栄を支えるものである。たしかにキリスト教的社会倫理には背馳するかもしれないが、近代社会が求める新しい産業社会の要請に合致するものでもある。これは、営利を求める経済活動を抑圧していた中世のキリスト教的経済倫理に大きな転換を迫るものであった。マンデヴィルの経済思想の意義の一つはこの経済観念の大胆な変更にあるといえる。その意味で、彼はいわば「後期ルネサンス人」として、近世的経済観を脱却して近代への道筋を開いたともいえるのではないだろうか。

さらに、マンデヴィルの『蜂の寓話』は経済学説史の観点からもその内容を再評価することができる。そこには経済学が学問として確立する以前の書物であるにもかかわらず、市場経済に関する本質的な課題が随所に散りばめられている。それらは理論的に系統だって展開されたものではないが、並外れた観察力で現実経済の仕組みを解き明かしている。それは風俗刷新運動に対する風刺を目的としたものであったとしても、その弁明のために使われた論法は、近代経済学における経済理論と軌を一にするものである。マンデヴィルの説明が説得力をもつのは、それがケインズの有効需要の原理の考え方に支えられているからである。また、その説明はアダム・スミスが重視した市場機能とそれにもとづく経済的繁栄の論理に合致するものである。このような、マンデヴィル、スミス、ケインズの三者に通底する共通性の暗示することは、おそらく、その分析と所説が部分的たりとも「人間の本质」を抉り出しているからであると見ることができよう。さらに、奢侈を現実のものにするための売手のマーケティング戦略について

での記述にしても、そのまま現代に当てはまる斬新な内容となっている<sup>14)</sup>。こうした視点からみると、マンデヴィルの『蜂の寓話』は、現代においてなお経済社会を理解するための示唆に富む内容を有する文献の一つであるといえよう。なお、『哲学辞典』(第9刷, 平凡社, 昭和53年)によれば、マンデヴィルのこの思想は、アダム・スミスのほかに、パークリー, ヒューム, ベンサムやさらにはヴォルテール, モンテスキュー, エルヴェシウスらにも多大な影響を与えたと述べられている。

(注)

- 1) マンデヴィルの「ブンブンうなる蜂の巣」と題するこの詩の訳については、「1, はじめに」の節において述べた、上田辰之助, 泉谷治, 鈴木信雄の3氏の訳を参照させていただいた。その上で、より正確で読みやすい表現を心がけた。なお、今回の翻訳にあたって、日本大学商学部元教授の中山直次先生に訳稿全体に目を通していただき、文法上の問題も含めて適切なアドバイスをいただいた。この翻訳が少しでもマンデヴィルの色調を的確に表現できたとするなら、ひとえに中山先生の懇切丁寧なご指摘とご指導のおかげである。この場を借りて謝辞を申し上げたい。
- 2) 内容を考慮して、destroy'd を意識した。
- 3) 原文では、Flail。これは固有名詞(人名)であるが、これを名詞として用いる場合の意味「穀ごお(手動による脱穀の道具)」から「某フレイル(農夫)」と訳した。
- 4) ブルゴーニュ, オルレアンは、フランス中部の県や地域名で、ぶどう, ワインの産地である。
- 5) クローエ(Chloe)は、女性名だが、古代ギリシャの「豊穡と大地の女神」に由来する。
- 6) この『詩』は、全体にわたって「韻を踏む」という形式美が整えられている。書かれたのが300年以上前であり、文体も古いものである。ただし、翻訳にあたっては、読者が現代の経済学説史に関する研究者であることを前提にして、古文調の表現を避けて現代語訳にすることにした。また、直訳すると不可解な表現となる箇所については、内容に応じて意識している。なお、『詩』の中に付けられた(A)(B)(C)…は、1705年版にはなく、1714年版で加えられたものである。途中、(J)(U)(W)が抜けているのは、当時のアルファベットのあり方によるのであって、抜けているのではなく、これらの文字が用いられなかっただけである。
- 7) 風俗刷新協会の活動については、ホーンの『バーナード・マンデヴィルの社会思想』の第1章「マンデヴィルの風俗改革」に当時の状況が適切に纏められている。(Horne, 1978, 邦訳, 1990年)
- 8) ハチスンの奢侈論批判については、テラーの『ハチスン・ヒューム・スミス—経済学の源流—』の第2部, 第4章「奢侈と儉約」参照。(Taylor, 1965, 邦訳, 2007年)
- 9) キリスト教倫理による節約が資本主義経済の発展のための原資を作る上で一定の役割を果たしているという見方について、それを正面から取り上げた文献として、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(Weber, 1920)をあげることができる。
- 10) ケインズは、『一般理論』の中で、たとえピラミッドの建設でも需要の増大があれば、それは生産を促す要因となると述べている。(Keynes, 1936, 邦訳 p.129)
- 11) これについては、『一般理論』の第23章「重商主義その他に関する覚書」参照。ケインズはこの章でマンデヴィルの『詩』を引用しながら、5ページにわたってその主張の内容を紹介し、評価している。(Keynes, 1936, 邦訳, pp.360-364)
- 12) これについては、ハイルブローナーが、スミスは、「市場メカニズムの中に、社会が秩序だった物質供給を

## マンデヴィルの経済思想と「ブンブンうなる蜂の巣」

- 行うための自己調整的なメカニズムを見出したのである」と述べている。(Heilbroner, 1986, 邦訳 p.090-091)
- 13) スミスの経済活動における人間への信頼については、関谷喜三郎「マンデヴィルの消費経済論」(関谷, 2019)における、「2 アダム・スミスとマンデヴィル」の節の「(2)『道徳感情論』とマンデヴィル」参照。
- 14) 『蜂の寓話』には、販売促進のためのマーケティングの極意とも言うべき斬新な内容が的確に纏められている。(Mandeville, 邦訳, pp.76-77, pp.289-293)

### (参考文献)

- 上田辰之助 (1950) 『蜂の寓話—自由主義経済の根底にあるもの』新紀元社
- 関谷喜三郎 (2019) 『マンデヴィルの消費経済論』日本大学商学部, 「商学集志」, 第 89 卷, 第 1 号, pp.1-17
- 田中敏弘 (1966) 『マンデヴィルの社会：経済思想』有斐閣
- (1984) 『イギリス経済思想史研究』お茶の水書房
- 山口正春 (2014) 『アダム・スミスとその周辺—思想・経済・社会—』三恵社
- Barbon, N. (1690) A Discourse of Trade, 1690. A Reprint of Economic Tracts, edited by Jacob H. Hollander, 1903. 久保田芳和訳, 『交易論』東京大学出版会, 1975 年
- Defoe, D. (1730) A Plan of the English Commerce: Being a Complete Perfect of the Trade of this Nation, Well the Home Trade As the Foreign, Second edition, Reprints of Economic Classics (rep.ed) 山下幸夫・天川潤次郎訳, 『イギリス経済の構図』東京大学出版会, 1975 年
- Heilbroner, R. L. (1998) 第 7 版, The Worldly Philosophers, c/o William Morris Agency, Inc. New York, 八木甫, 松原隆一郎, 浮田聡, 奥井智之, 堀岡治男訳『入門 経済思想史 世俗の思想家たち』ちくま学芸文庫, 2001 年
- Horne, T. A. (1978) The Social Thought of Bernard Mandeville: Virtue and Commerce in Early Eighteenth-Century England; The Macmillan Press Ltd. Columbia University Press, 山口正春訳, 『バーナード・マンデヴィルの社会思想—18 世紀初期の英国における徳と商業—』八千代出版, 1990 年
- Keynes, J. M. (1936) The General Theory of Employment Interest and Money, 塩野谷祐一訳, 『雇用・利子および貨幣の一般理論』ケインズ全集第 7 卷, 東洋経済新報社, 1983 年
- Mandeville, de Bernard (1714) The Fable of the Bees: or Private Vices, Publick Benefits, 鈴木信雄訳, 『新訳 蜂の寓話—私悪は公益なり—』日本経済評論社, 2019 年
- North, D. (1691) Discourses upon Trade, A Reprint of Economic Tracts, edited by Jacob H. Hollander, 1907, 久保田芳和訳『交易論』東京大学出版会, 1975 年
- Smith, Adam, (1759) The Theory of Moral Sentiments, by Adam Smith, Professor of Moral Philosophy in the University of Glasgow, London: Printed for A. Millar, in the Strand; And A. Kincaid and J. Bell. in Edinburgh, MDCCLIX, 水田 洋訳, 『道徳感情論 上・下』岩波文庫, 2003 年
- (1776) An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations. reprinted in R. H. Campbell and A. S. Skinner (eds.) 山岡洋一訳, 『国富論 上・下』日本経済新聞社, 2007 年
- Taylor, W. L. (1965) Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith, Durham North Carolina: Duke University Press. 山口正春・川又 祐訳『ハチスン・ヒューム・スミス—経済学の源流—』三恵社 2007 年
- Veblen, S. (1899) The Theory of Leisure Class. An Economic Study in the Evolution of Institutions, New York 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店, 1961 年

マンデヴィルの経済思想と「ブンブンうなる蜂の巣」

Weber, Max (1920) Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd.1, 1920, 大塚久雄訳, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫, 1989年

**(Abstract)**

This article is a translation of Bernard de Mandeville's anonymous poem from 1705 "The Grumbling Hive" or "Knaves Honest" and his response to criticism of this poem. It is attempted to reassess the significance of Mandeville's economic explanations developed in "The Grumbling Hive" by examining "The Fable of the Bees" or "Private Vices" from the perspective of economic thinking. "The Grumbling Hive" has been already translated (as a poem) a few times, but this article corrected some of the errors and inappropriate expressions in former translations in order to make it more accessible, readable, and more readily understandable. Moreover, it is reaffirmed that the explanation used in "The Fable of Bees" reveals Mandeville's argument as being a prototype for the economic principles which modern economics has established itself on.